近年の心理学理論における死と宗教
―恐怖管理理論の批判的考察―

イーリャ　ムスリン

本稿の目的

恐怖管理理論（Terror Management Theory，以下TMTとも）はアメリカで活躍した文化人類学者E. ベッカーの思想（Becker 1971/1962，1973，1975）を経験的に確かめ，体系化しようと，アメリカの実験心理学者のJ. グリンバーグ・T. ピジンスキ・S. ソロモンが80年代の半ばごろに発表したものである（Greenberg, Pyszczynski and Solomon 1986）。社会心理学の領域で生まれたこの理論は，ここ20年ぐらいの間に着々と調査と研究を積み重ねながら展開し，宗教研究を含め，多くの分野に大きな影響を与えるようになっている。本稿では恐怖管理理論における宗教の捉え方や死と宗教の関係を考察し，この学派の宗教に対する研究アプローチと結果における問題点を指摘することを主な目的とする。本稿は，死に関する宗教信仰と個人や社会における死に対する感情・認識の関係，宗教成立過程における死の位置，死関連の信仰が宗教の存続と維持において果たす役割などといった問題を扱う心理学理論に注目する筆者の研究の一環である。これら本稿の課題に際して，宗教の多様性を重視し，研究者の宗教概念を問いながら自文化中心的態度を戒める宗教学的なアプローチ，及び，死の不安の多側面性や複雑性を意識する死生学的な立場から取り組みたい。具体的には，次のように論を進める。第一節では恐怖管理理論の概要を述べ，続く第二節ではこの理論における宗教の捕らえ方を紹介し，それについて論じる。第三節では近年学術界で提出されている恐怖管理理論への批判を考察する。第四節では宗教学的・死生学的なアプローチを採用しつつ，恐怖管理理論の宗教と死の恐怖に関する考え方の批判的な分析を行う。最後に第五節では，恐怖管理理論の宗教と死の問題に関する今後の方向性や課題を取り扱い，本稿の結論を述べたい。

１．恐怖管理理論の概要

恐怖管理理論は全般的な文化及び死の不安・自尊心に注目する機能主義的理論である。前述３人のアメリカの学者は自らの理論を「人間行動の実存論的・精神力動論的分析」と称しており，理論の対象を「死の不可避性に対する意識が我々の生き方に与える影響」とし，「死の生への影響に関する理論」と広く定義付けている（Pyszczynski, Solomon, Greenberg 2006/2003, pp.7-8）。彼らの理論的枠組みに関しては，ベッカー以外に，J. R. リフトン，（ベッカーが受け継いだ）O. ランク，G. ジルボーグ，S. フロイト，J. ボウルビーなどの影響が見られる。TMTによると，人間は将来の状況を想定出来る認知的能力を持っているために自らの有限性を意識できる，あるいは

意識せざるを得ない。死の不可避性に対する意識は進化過程において発展してきた自己生存確保への本能・傾向と不死への願望とあいまって死への大恐怖（terror）の可能性を生み出し，その恐怖を管理する機能のある世界観の発展や維持，及び自尊心の追求に繋がっている（Greenberg et al.1986, Solomon et al.1991など）。文化的世界観は，個人を，国家や宗教団体のような，永遠とされる象徴的現実世界における価値ある貢献者として位置づける。これにより，個人は「象徴的な不死」，すなわち，自己の死を超越しうる道を獲得することができる。より具体的に言えば，文化というのは，人々に，世界は安定した秩序立った有意義で恒常なものであり，自分という一個人は単なる無意味な宇宙における束の間の物質的な有機体ではなく，寧ろ有意義な現実における重要な存在だという信念を持たせることで絶えない潜在的死の恐怖のコントロールを可能とするということである（Rosenblatt et al. 1989, Greenberg et al. 1990, Pyszczynski, Solomon and Greenberg, 2006/2003など）[1]。TMTによると，文化的世界観のほかに，死の恐怖を緩和する機能を持つのは自尊心である。この学派によれば，自尊心は自分が有意義な世界における価値ある参与者だという信念である。人々は自らの世界観への信念・信仰を維持し，自文化に与えられた役割を果たしてその理想を達成すること，つまり文化的規範に忠実に従うことで自尊心を取得する。不安への緩衝としての自尊心の機能は普遍的であるが，世界観と同様に，自尊心も文化的な構築物であるから，その源泉は文化によって異なる（Greenberg, Pyszczynski and Solomon 1986, Greenberg et al. 1993, Pyszczynski et al. 2004など）。

このような理論的な立場を経験的に確かめるために，TMT学派は様々な環境や設定に基づく心理学的な実験を20年にわたって繰り返して行っており，その数は300超えている（Pyszczynski et al. 2006, p.329）。TMT論者によると，これらの実験の結果は次のようなことを示している。自らの世界観が脅かされた時に，人々は死への不安を膨らませる（Greenberg et al. 1990, 1995; Schimel et al. 2007など）。一方では，死関連の刺激を受けた時には，道徳観・価値観・宇宙観など，自らの世界観をより熱心に弁護し，その正当性を異文化に対してより強硬に主張するようになったり，自分の世界観を共有しない，あるいはそれを何らかの形で脅かす者をより厳しく扱うようになったりするということである。死関連の刺激を受けた後の，自分と違う他者の扱いにおける変化というのは批判の強化だけではなく，他者に対して物理的に距離を置く，あるいは攻撃を仕掛けるなどという行為も含んでいる（Rosenblatt et al. 1989, Greenberg et al. 1990, 1992, 1995; Florian and Mikulincer 1997など）。また，TMT研究では，死による刺激を受けた場合に，人は自分と異なる他者に対して極めて多様な理由で普段よりも強い批判や攻撃的行動を展開することが確認されている。他者への反発の理由となる相違点とは宗教，国，政治的信念，趣味，大学の所属などである[2]。さらに，実験によれば，死関連の刺激を受けた際に人々は自尊心の向上を求めるようになる，自尊心の高い被験者が自尊心の低い被験者より不安を少なく示す，そして褒めることなどにより被験者の自尊心を高めた場合には，その被験者における死への不安が減少する，などということも明らかになっている（Greenberg, Pyszczynski and Solomon 1986, Solomon et al.1991, Greenberg et al. 1993など）。

人の世界観や価値観，あるいは自尊心に上記のような影響を与えるのが死の不安であることをはっきり証明し，他の要素が関わっている可能性を排除するため，TMT学派は，被験者における気分高揚や低下，生理的な変化，（試験での失敗，人前での演説，将来における不確実性，肉

体的な痛み，就職などに対する）様々な種類の不安による影響を想定して多数の実験を実施するなど，厳格な科学的な手順を踏んでいる[(3)]。上記の研究成果は，TMTにおいては，個人や集団における攻撃性，異文化・他集団・他者に対する偏見，差異の維持，宗教や民族紛争などの説明に当てられている[(4)]。

ジルボーグ（Zilboorg 1943）[(5)]やベッカーの見解（Becker 1973）と同様に，TMTの論者は，人々が常に意識的に，または無意識に死の不安を感じており，常にそれを心理的に抑えようとしていると考える（Pyszczynski, Greenberg and Solomon 1999, 2002など）。ここで指摘すべきは，これらの論者が死という言葉を用いる際，死そのものというよりも，むしろ自己の「完全消滅」を意味するということである（Solomon, Greenberg and Pyszczynski 1991, p.96）。TMT学者によると，人は意識的に死を考える際に，死の脅威に対応するために，より健康を守ろう，あるいはリスクを避けようというような具体的で現実的な行動に出るか，抑圧や否定という現実を歪曲する防衛機制を用いる。これらの防衛機制は近位機制であるが，それに対して世界観への信念・信仰の強化及び自尊心の高揚は，遠位防衛として機能し，無意識における死の恐怖を抑える（Pyszczynski, Greenberg and Solomon 1999）。TMTの３人の提唱者は特にこの無意識における死の恐怖の管理に注目する。世界観と自尊心の不安緩衝としての効果は主に死が意識の焦点を外れた時に現れ，情報加工が無意識的に行われる経験的認知にあって，論理的あるいは合理的な思考（理性的認知）の領域の外にあるということである。TMT学派によると「恐怖管理とは，死ぬ運命であるという理解が生ませた恐怖の可能性を回避するように働く，常に進行中の無意識的な防衛である。」（Pyszczynski, Solomon and Greenberg 2006/2003, p.55）。より具体的には，遠位機制は死に関する認識が無意識の領域から意識の領域に浮かび上がることを防ぎ（Pyszczynski, Greenberg and Solomon 1999, 2002など），死が意識的な注意の対象になった時に動き出す否定や抑圧といった近位防衛機制の使用を減少する効果を表している（Greenberg et al.1993）。（当然，死による脅威が強くて，遠位防衛を破って意識の領域に入る場合はある）。

このようにTMTの唱道者たちは，世界観への信念・信仰の固さと自尊心の程度が死の恐怖の増減に関係していることを主張する。彼らによれば，人間の行動と心理的エネルギーの多くは絶えず世界観への信念・信仰と自尊心の維持に向けられており，宗教・経済・科学といった人間の営みは，文化を媒体として個人というレベルで作用する死の恐怖への対応策であるという（Sheldon et al. 2004, pp.35-36参照）。

２．恐怖管理理論における宗教

この理論的な枠組みにおいて，宗教は，宇宙論や道徳的な規範を通して有意義で秩序立った世界を成立させることで象徴的な不死を提供するのみならず，再生や来世に関する教えを勧めることによって字義通りの不死まで約束するものである。３人の学者は，実証研究の結果を多く紹介し議論を丁寧に展開するという学問的な体裁ながらも，ある程度一般向けに書かれた共著『9.11の後：テロルの心理学』[(6)]の序論のなかで，字義通りの不死を約束していることは「疑いもなくほとんどすべての宗教の主な魅力である」と述べている（p.20）。この主張を説得的にするため，彼らは1897年に出版された，「文化人類学的な研究に基づく」19世紀の生物学者で小説家G. アレ

ンの『神観念の進化』から次の引用をする。「神観念というのは，拡張されたまたは超自然的な能力や属性を持つ死後でも生き続ける霊あるいは霊魂として見なされた死者のことでしかない〔略〕全人類の宗教的本能の中心的な部分は，個々の信者の不死へ願望を含めた，死者の神聖化や礼福化への傾向である」[7]。次に３人の論者は，アレンの書物から100年経った1990年代においても，字義通りの不死をあらゆる組織的宗教の中心的特長として捉えている観念が見られると言う。その証拠として（主に娯楽的な大衆向けの本を書くジャーナリスト）C. パナティの著書[8]からアブラハム由来の三宗教（すなわち，ユダヤ教，キリスト教，イスラム教）における天国観を記述した部分が引用される。彼らは，イスラムやヒンズー教における死後の世界に関する教えや信仰に短く触れた後，死後の世界を信じる現代アメリカ人の割合を示す統計を挙げることで，序論における不死への信仰の普遍性についての考察を締めくくる。このように，普段自らの領域である社会心理学の実験や論文では学術的な規範を厳守する３人は，宗教に関する議論において学問的な権威を十分参考せずに，証拠の裏づけが足りないと思われるような引用をするとともに，アブラハム三宗教中心的な一般論を述べている。

また，「恐怖管理理論によると，すべての文化的世界観は死の恐怖の管理を手助けするが，大抵の宗教でその中心を成すのは死を超越する信仰であるから，来世への信仰を勧めることで死の恐怖を和らげることが宗教の中心的な機能だと言えるだろう。」というヨナスとフィシャーの言葉が示すように，TMTの議論において，宗教全体は，死の恐怖の緩衝そのもの，あるいは究極の緩衝として捉えられている（Jonas and Fischer 2006, p.554）。宗教の不安緩衝としての働きを経験的に確かめたTMTの実証研究としては，アメリカとオランダの被験者を対象に，来世に関する宗教信念が死の不安を緩和することを示した調査（Dechesne et al. 2003）や，内発的な信仰を持つ者はほかより死の不安が低いという結果を発表したドイツの調査が挙げられる（Jonas and Fischer 2006）。TMT学派が死の恐怖の普遍性を強調し，それに対する対応が人間行動の背景にある最も強力な原動力だと論じる際に，そうした立場を裏付ける証拠として，大抵の宗教が来世に関する教えを提供する点が頻繁に引き合いに出されるが，それにしては，宗教信仰を主な対象とする調査は非常に少ないということも言えるだろう。

３．近年の心理学におけるＴＭＴ批判

心理学の分野において，恐怖管理理論はソシオメーター理論，自己決定理論，意味管理理論および進化心理学の立場から批判を浴びている。

まず，ソシオメーター理論では，自尊心を根本的な人間のニーズまたはあらゆる人間行動の目標としてではなく，他者との関係及び社会から排他される危険性を評価するための基準・尺度として捉えている。確かに恐怖管理理論が示した通り，死の不安と自尊心の間には強い繋がりがあるが，これは何故かというと，死が他者との関係を断つ究極の社会からの排除であるからだと，ソシオメーター理論の提唱者は考える（Leary et al. 1995, Leary and Baumeister 2000）。さらに，レアリーは，死の恐怖が人間の心理や行動に大きな影響を与えているからといって，TMTが主張するように，心理的防衛がうまく働かなければ，死への大恐怖が人間を完全に麻痺させるから，人間が順調に機能できるように常に死の恐怖と戦わなければならない，ということには必ずしも

ならないと指摘する。つまり，死を恐れても十分機能できる人間もいるだろうし，進化論に沿って考えれば，完全に，或いはかなりの程度死の恐怖を塞いだ生命体よりも，死をより畏怖する生命体のほうが生存の可能性が高いということもあり得る（Leary 2004, Leary and Schreindorfer 1997）。

次に，自己決定理論の唱道者は，死を意識させられると人が象徴的な不死を約束する自分の世界観への執着を深め，その際に自尊心が死の不安への緩衝として機能する，という数々の実験に基づいた恐怖管理理論の主張は否定しない。しかし，自尊心を人間の最大の心理的ニーズとして強調するTMTに対して，自己決定理論は人間の基本的な心理的欲求が複数ある（有能性，自立性，関係性）と見ている[9]。また，自尊心をただの不安に対する防衛として捉えがちなTMTと異なり，自尊心の精神的成長における役割をも指摘する（Ryan and Deci 2004）。

自己生存の本能を「主要動機」，そして生存を「あらゆる行動の目指す最高目標」（Pyszczynski, Greenberg and Solomon 1997, p.5）と規定する恐怖管理理論の一元論的な動機付け論には特に批判が加えられている。すなわち，死を回避し自己消滅に対する恐怖を抑えることを人間の根本的な動機付けとして捉えている理論は，M. ムレーヴンとR. F. バウマイスターが指摘するとおり，少なくとも一部の自殺，自己を脅かす危険な行為や他者のための自己犠牲を説明することは出来ない（Muraven and Baumeister 1997）。

また自尊心追求の精神的なコストの高さ，つまり，そこには不安を生み出す側面もあることを指摘する研究もある。TMTの提唱者は，自尊心が低くなると様々な精神的障害が生じるなど，自尊心の重要性を証明する研究が多々あるとして，人間には自尊心が必要不可欠であるいう結論を導く（Pyszczynski et al. 2004）。だが，クロッカーとヌエルは，重要だからといって必ずしも不可欠であることにはならないと述べる（Crocker and Nuer 2004）。加えて，この２人の論者は，TMTでは自尊心はあらゆる不安の解消手段として理想視されているが，自尊心の追及が必ずしも心理的に望ましい効果ばかりをもたらすわけではないとも述べている。というのは，人は自尊心を維持するまた高めるために自分に都合よく現実を歪曲したり，或いは逆に，自尊心を求める際に，生活の中で正常に機能できなくなってしまうほど自らを厳しく評価したりするからである。

別の論文でクロッカーは，パークとともに，自らの価値を証明しようと（自尊心を追求して）行動をすることは，（クロッカーとパークが根本的な人間のニーズだと考える）有能性，関係性，自立性，及び自己管理と学習プロセスの妨げになり，時間が経つと，最終的に精神的・肉体的に健康にも悪影響を及ぼすこともあると述べる。そのため，自尊心の重要性とは，どの程度それを持っているかというよりも，どのようにそれを得ようとしているか，あるいは得ているのかにある，とクロッカーとパークは論じる（Crocker and Park 2004）。２人はさらに，自尊心が何らかの対象に対する感覚であることを強調しており，自尊心が人の性格の抽象的な特徴ではなく，職業的業績・学業・容姿などといった具体的な対象と結びついて特化されたものであるという。

簡潔に言うなら，TMTは死の恐怖・不安を人間心理や行動の強力な原動力として捉えているが，死の不安以外の意味，人生の目標，成し遂げたいものなど，それらを人間の主な動機あるいは原動力として認めるべきものがあるのではないかというのが以上の諸批判の主な主張と言えよう。

一方，進化心理学の側からは，TMT学派が論ずる自らの理論が進化論と一致している[10]とい

う点に対して，多くの反論が提出されている。D. M. バスは，自己生存を強調し生殖を無視するTMTの進化の概念は古典的であると指摘し，人間の動機付けを説明するなら，不安の減少（恐怖の管理）よりも，性的相手の選択や性交，子育て，集団内での地位獲得，連合形成などのような具体的な環境適応の問題に配慮したほうがより有効であると，進化論に代表的とも言えるアプローチで批判する。恐怖管理理論では死への恐怖を緩和する心理的メカニズムが環境適応を可能とするものとして進化してきたと考えられるが，もしそうならその心理的なメカニズムが具体的にどのようにして生存や生殖関連の諸問題の解決に繋がっているかを説明する必要があるとバスは述べる（Buss 1997）。

バスの議論の延長線に，P. ボイヤー，L. A. カークパトリックなどの進化心理学者の批判があり，TMTでは生存の本能が死への恐怖の主因の一つとされているが，（特化していない）一般的な生存の本能が果たして存在するかどうかということ自体は微妙であると言う（Boyer 2001, Kirkpatrick 2006）。彼らによれば，人間の自らの有限性に対する意識や不死への願望を人間の行動や宗教（文化全体）を説明する理論の出発点とするTMTは生存を人間行動の絶対目標とし，死の不安を生存本能とセットで考えているが，近年の進化論の研究によって人間の能力や行動の多くは，自己生存ではなく，生殖と遺伝子伝達を最大の目標としているということが明らかになっている。人間の脳には抽象的で一般的な生存の総括的な確保を目指すソフトウェアのようなものがなく，進化によって発展してきた人間の心理的メカニズムは食料採集，集団における個人の評判の拡大，連合形成，性的パートナーの獲得などといった具体的な環境適応問題を解決するように機能しており，そうすることで最終的に生存と生殖（遺伝子伝達）にも繋がっている。そのために，TMTのように，人間が量的に程度の高い自尊心を目指すように出来ているなどという考え方をする必然性はない。むしろ，自尊心というのは我々の，具体的な適応問題に関する成功や失敗を見極める物差しのようなものであり，環境適応問題に対応するための行動戦略の変更を促すように機能していると考えたほうが妥当であろうというのが進化心理学の主張である（Kirkpatrick 2005, pp. 228-229参照）。

また，進化心理学のなかでは生殖や遺伝子伝達が人間の最終的な目標となるため，ボイヤーは，遺伝子伝達への脅威に対する不安をすべて考慮に入れるべきであると主張する。つまり，自己の死だけではなく，遺伝子を残す上で重要な条件となる共同体・社会における自己の評価，地位，容姿，または（一部同じ遺伝子を持つ）親族や子孫の死への不安，そういった諸点についても研究し，説明すべきである。さらに，死の不安・恐怖を常に作用し，常に心理的な防衛を要する恒常的な力として捉えている恐怖管理論に対して，ボイヤーは，死をそのような抽象的，一般的な現象として考える人は少なく，そうした死の概念は自文化中心的であると注意を喚起する。彼によれば，多くの人は，一般的現象としての死よりも，自己の死あるいは親族の死といった具体的な死しか意識しない（Boyer 2001, pp.205-206）。

一言で言えば，宗教を普遍的な生存本能によって生じる普遍的な死の不安に対する緩衝システムとするTMTの説は，宗教を進化的な環境適応機能を持つものとして捉えているが，宗教には様々な反適応的な要素もあるために，この見方は疑問視されるというのが進化心理学の重要な議論の一つである[11]。

４．本稿におけるＴＭＴの評価

恐怖管理理論は現在社会心理学の分野における主要な理論の一つで，宗教に関しても，進化心理学と合理的選択理論とともに近年最も体系的で広く引用される理論の一つである。恐怖管理理論の研究成果は死の不安，自尊心，価値観，偏見，攻撃性，紛争，テロ，外国人や少数民族の扱い，教育など，幅広い社会現象の諸研究に有効に応用されている。TMTは，死の不安と自分の信念・価値観への固執の間に非理性的で非論理的な関係が存在することを指摘することによって，他宗教の受容，他者の信仰や宗教実践に関する偏見，または宗教紛争の背景にも潜む重要な心理的な仕組みを明らかにした。その意味で，この理論は宗教の理解への貢献を成していると言えるが，その宗教の捉らえ方には問題点がないわけではない。

まず，TMTは，宗教（及び文化全体）という現象を，それが意味や世界が秩序立って安定したものであるという信念を与える点から，死の不安への緩衝として一義的に捉えているようであるが，信者のなかに死の不安を引き起したり，高めたりする宗教教義も存在すること（何らかの罪を犯した場合地獄に落ちて苦しむ，あるいは人間より寿命の短い，または苦しい生涯を送ることを強いられる存在に生まれ変わってしまうなど）は考慮されるべき。実際に，具体的な宗教，具体的な人間というレベルで宗教信念が持つはずの，死の意識や不安を和らげたり，取り除いたりする働きを経験的に証明できなかった研究があり，或いは宗教において不安をあおる効果さえも確認した実証研究もある。以下では，死に対する意識や感情と宗教信仰の複雑な関係を示すために，互いに異った結果を示す研究調査をそれぞれ紹介しておきたい。

I. E. アレクザンダーとA. M. アルダースタインはインタビューや問答紙による調査を行った結果，宗教心を持つ者は幼児期の早い段階で死を意識するようになり，（大人になった後では）普段においては非宗教者よりも死を意識しているという結論に至った（Alexander and Alderstein 1965）。A. L. バーマンは命が危険に晒されている状況下では，他界を信じる人も信じない人も同様に不安や恐怖を感じたり，パニックに陥ったりすると特定し，ここから，生命の危機に晒された時の反応や感情と他界への信仰との間には，これといった相関関係はないという結論を導いた（Berman 1974）。また，D. マーティンとL. S. ライツマンは，積極的に教会に通ったり，宗教的行事に積極的に参加する者は死の恐怖が弱い傾向があると述べている（Martin and Wrightsman 1965）。R. D. カホーとR. F. ダンは，G. W. オルポート・J. M. ロスの内発的動機付け／外発的動機付けの基準を採用し，内発的動機を持ったプロテスタントやカトリックの宗教心と死の恐怖は不釣り合いであると指摘する（Kahoe and Dunn 1975）[(12)]。B. スピルカ他の研究（「内発的動機を持ち，かつ献身的」〔intrinsic-committed〕と「外発的動機を持ち，かつ黙認する」〔extrinsic-consensual〕という類型論を使用）によると，「内発的動機を持ち，かつ献身的である」人が死後への不安が少なく，死そのものを自分の勇気，威厳，人生の意味などの再確認の機会として前向きに捉えている一方，「外発的動機を持ち，かつ黙認する」者は，死に対してマイナスなイメージを持っていると言う（Spilka et al. 1977）。しかし，H. ファイフェルが行った，宗教心を持つ／持たない健康な人，及び宗教心を持つ／持たない，病気の末期的な患者のインタビューを通した意識調査によると，全体的に，宗教心のある者の方が死を恐れている。そして，内発的動機付け／外発的動機付けの基準を応用しても，内発的動機による宗教心を持った者と宗教心のない者とでは，死の

恐怖という点ではほとんど変わりがない。この調査では，天国へ召されると信じているにもかかわらず，死を恐れるという被験者の例も出ている（Feifel 1974）[13]。しかし，ファイフェル自身は，後の研究で，宗教心を持つ者の死の恐怖が持たない者のそれより程度が低いという死の恐怖と宗教心のネガティヴな相関性を報告する（Feifel and Nagy 1981）[14]。また，アルバラード他は，200人の調査対象者のうち，宗教心が強く来世への強い信仰を持つ人は死関連の不安・鬱・動揺が低いという結果を発表している（Alvarado et al. 1995）。18歳から88歳の346人の対象者における死の不安と宗教心の繋がりを調べたJ. A. トーソンとF. C. パウエルは，内発的な宗教心の強い者がより少ない死への不安を示すという結果を提示した（Thorson and Powell 1990）。さらに，2002年にリトアニアで行われた研究では，内発的宗教心を持つ対象者が示した未知への恐怖（死後への恐怖）は外発的動機による信仰を持つ者や無神論者よりも低いという，結論が出ている（Roff et al. 2002）。またエジプトで行われた調査では，宗教心を持つ若齢層の対象者が死によって感じる動揺（'death distress'：死への不安，死に関連した憂鬱及び妄想を含む用語）を研究した結果，宗教心が死への不安と憂鬱と反比例するという結果を報告している（Al-Sabwah and Abdel-Khalek 2006）。とはいえ，303人の日本人大学生を対象とした研究では，宗教に好意的な態度を有する者は概して肯定的な死観を持つが，「宗教は死の不安を軽減させる」という仮説は検証されなかった（河野2000年）。また，死に対する態度の総括的な研究として，宗教心・性別・結婚の有無など複数の要因による影響を分析したカナダの研究では，宗教心の強い者は死後の未知の世界をそれほど恐れないとはいえ，信仰をあまり持たない者より死者や自己消滅を恐れるという結果が出ている（Power and Smith 2008）。デズッター他は471人のベルギー人を対象に宗教心を持つ者のほうが持たない者よりも一般的により素直に死を受け入れる傾向があるが，宗教教理を字義通りに信じる者は死の不安が無神論者より大きいと発表している（Dezutter et al. 2009）。

宗教心及び死の不安の捉え方や測定の仕方に関する方法論的な相違の影響で異なる結果が出ることもあるが，ここに挙げた結果を見ている限り，概してはっきりした，死の不安と宗教信仰の間の一方的な繋がりを認めることは難しいと言えよう。そのため，全般的な宗教が死の不安に対してどう機能しているかという議論よりも，特定の宗教的信念・信仰もしくは実践が特定の宗教，団体あるいは個人においてどう機能しているかについて議論する方が有意義ではないかと思われる。TMT学派のように，小さい分母で幅広い現象を説明しうるのが優れた理論の条件の一つだというように考えるのは基本的に妥当だと思われるが，いざ宗教を対象とすると，実際そうではない場合があり得，克服不可能な壁に当たる場合がある。多くの人が死の不安や意識的・無意識な不死への願望から宗教に傾き，宗教教理と実践の一部が死の不安の緩和に繋がるとはいえ，宗教が持つ不安緩衝の機能を中心とした主情主義説のみでは，全般的な現象としての宗教を説明しきれないであろう。TMT論者が死後の再生や来世に関する信仰を，字義通りの不死の約束という死の不安を和らげる緩衝として考え続けているのは，おそらくその具体的な信仰の内容に十分注目していないからではなかろうか。地獄，死霊・怨霊に関する不安のみならず，ホールやファイフェルの研究が示すように，自分が天国に向かうであろうということに対してさえ不安を持つ信者がいる。このことを，宗教が秩序，意味，自尊心を与えることで死の不安が抑えられるという側面に固執する理論で説明できるのかは疑問である。他方，TMTの宗教研究にはより具体性を持たせる必要があると思われるが，それは単に特定の宗教教理，その教理の特定の宗派や個人

による受容，あるいは宗教者個人の経験や宗教的動機という具体的な宗教性・宗教心を研究するという意味のみではない。研究の中で自己の死や大切な他者の死，そして自己の死に関して言えば，死にゆく過程に対する不安，生の損失としての死そのものへの不安など，様々な死の不安の具体的な側面にも注目する必要があろう。例えば，心理学者や哲学者は死への不安の一次元として死後への不安を取り上げているが[15]，TMT論者はこの種の不安を視野に入れていないようである。したがって，恐怖管理理論が今後宗教研究を対象とする場合に検討すべきは，死への恐怖を緩和できない信仰や世界観の存在（或いは，より広く，意味管理理論の唱道者P. T. P. ウォングが述べているような，あらゆる世界観が果たして意味や秩序の感覚を与えてくれるのか，破壊的な世界観はないのかという議論[16]）に関する問いである。もし宗教或いは文化がその性質や内容に拠らず存在するだけで死の不安を抑えるなら，ある意味でTMTは，その主張を裏付ける実験を行う必要がないとさえ言えるかもしれない。というのも，もしそうであるなら，TMTは最初からどんな状況でも正しく，皮肉にも反証不可能であるからである。そして，人間行動における普遍的な動機の特定や文化の総括的な説明を目指す恐怖管理理論であるが，儒教，老荘思想，或いは一部の新宗教のように現世に重点をおいて死後についてあまり語らない宗教，つまり，いわゆる現世否定的宗教のように恐怖管理理論の宗教論に綺麗に収まらない教理や信仰をどう説明するかという問題もこの理論の課題の一つだと指摘したい。

５．結論

恐怖管理理論は，宗教を含めた文化的世界観が人々に意味を与え，世界についての認識を組織化し，生活の上で必要な規範や原則を与えることで現実や人生の整理整頓を可能にするというようなことも一般的に述べており，意味追求と死への不安の関係の解明を目標とした具体的な実証研究[17]も行っている。また，近年批判への答えとして，人間の成長や自己拡張，（愛着理論の要素を吸収し）他者との関係という新たな次元も理論に導入している[18]。それ故に，恐怖管理理論が，死ぬ運命に対する慰めの欲求や死後の不確実性に由来する確実性獲得への欲望というような感情的な次元のみに専念する，全体的に極端に還元的な主情主義説であるとは言えないであろう。しかし，宗教に関して言うなら，この理論が宇宙についての知識としての宗教，宗教体験や実践，あるいは宗教の背景にある認知的メカニズムなどの側面を十分配慮せず，人間行動の唯一の原動力として捉えた死の不安・恐怖に方法として圧倒的に注目を注いでいる。また，死と宗教の関係に関する無反省な自己文化中心的な一般論を提示する。それらの点から，TMTが事実上宗教の主情主義的な還元化を行っているという評価はやはり避けられないように思える。

したがって，TMT学派は宗教の多様性や多面性をより強く意識し，宗教を研究対象とする場合にキリスト教的な宗教観念に基づく感覚に頼るのではなく，宗教とは何かを，より深く検討すること。そして，宗教と死に関する主張をより説得的にするために，異文化における来世や再生に関する信仰と死の不安のあいだの関係についても更に検証すること。これらが今後の恐怖管理理論の研究には求められるだろう。

註

(1) 同様な考えはBecker 1973においてみられる。

(2) このような反発を抑える効果があるとされるのは，高い自尊心のほかに，象徴的不死への強い信念・信仰(Florian and Mikulnicer 1998)，字義通りの不死への信仰(Dechesne et al. 2003)，家族や恋人や友人との確かな絆(Mikulnicer and Florian 2000)，そして許容性を重んじる価値観である(Greenberg et al. 1992)。

(3) TMT実験の形式に関しては，次のようなパターンが多い。まず，自尊心の死の不安への効果に関する実験である。このタイプの実験では参加者に研究の本当の目的を知らせない。参加者は，自尊心と死の恐怖の両者が操作対象となる被験者グループと，死の恐怖のみが操作される（あおられる）コントロールグループの二つに分けられる。本当の目標から気を逸らすという意図もあって最初はすべての参加者に（模擬の）パーソナリティテストを受けさせるが，実験の対象となるグループについては，テストの結果発表の時に，実際の出来に関わらず，必ずその受験者の性格を褒めてみせ，彼らの自尊心を刺激する（コントロールグループに対しては賞賛でも，批判でもない中立的なコメントをする）。それから，被験者グループに関して，パーソナリティテストの好結果によって自尊心が研究者の予想通りに高まったかどうかを確かめるために，被験者に自尊心尺度(問答表)を記入させる。次に，死関連の刺激を与えるために，すべての参加者に死刑や死体解剖の映像を見せるか，戦争や癌の患者についての話を読ませる。その後，参加者の死への不安・恐怖の程度を特定するため，死の不安尺度を記入させる。最後に，被験者グループとコントロールグループ，両組の自尊心と不安に関するデータを比較し，その関係を調べる。死と文化的世界観に関する実験については，両グループの参加者に死関連の刺激を与え，死の不安の程度を図ってから，被験者グループのみに彼らの世界観，価値観，生活様式，国などを批判する文章を読ませ，そのグループ共通の規範や道徳基準を違反する行為を紹介する。最後に，その批判的文章の内容または違反的行為を評価させて，被験者が死関連の刺激を受けた後に以前より自分の世界観や価値観をより強く弁護し，強調するようになったかどうかを確かめる（ここで重要なのは，被験者の世界観への批判の内容は死と関係がないということである）。

(4) ３人のTMTの提唱者によると，異なる世界観の存在そのものが，その個人が持つ世界観への脅威になる。そして，自分の文化的世界観が自尊心と死の恐怖の管理と密接に繋がっているために他文化・他宗教・他民族との平和共存は難しいという。「偏見と民族紛争などは文化的世界観が死の恐怖の緩和に利用されていることのほぼ不可避的な結果である。」(Pyszczynski et al. 2006/2003, p.85)。自分と異なる世界観や価値観を持つ他者への反応，あるいは他者に対する姿勢について，TMTの論者は以下の５つの類型を挙げている。１) 何らかの理由で自分の世界観が緩衝としての機能を果たさなかった場合，人は他者が持つ現実に対する認識を受け入れる〔改心・改宗〕。２) 他者をけなす姿勢〔侮蔑〕。改心が極めて少ないのに対し，このタイプの反応はよく見られるという。３) 他者に自分の世界観や価値観を受けさせる〔同化〕。もともと自分と異なる世界観を持った他者を同化させることそのものが自分の世界観の正当性を最もよく証明すると考えられがちであるため，同化を成し遂げた時の満足感は特に強いとう。４)自分の世界観と本質的に違う部分を拒否し，自分の世界観にダメージをもたらさない部分のみを選択的に導入・許容する姿勢〔部分的導入・許容〕，

５）同化を拒否し，部分的許容も不可能な他者を絶滅させること〔全滅〕（同書，pp. 29-34）。

(5) ジルボーグは戦時中に米兵を対象に，仲間が死んで自分が生き残った時の罪悪感，自分が敵を殺して，生き残った時の優越感・ナルシシズムといった死に対する感情を研究した。彼によると，これらの感情は，常に無意識の領域で働く死の恐怖がもたらした緊張感から生まれるという。

(6) Pyszczynski, Solomon and Greenberg (2006/2003). “In the Wake of 9/11: The Psychology of Terror”, Washington, DC: American Psychological Association

(7) Allen, G. (2000/1897). “The Evolution of the Idea of God”. Escondido: The Book Tree. Pyszczynski,T., Sheldon S., and J. Greenberg, op.cit., p.21から引用。

(8) Panati, C. (1996). “Sacred Origins of Profound Things: The Stories Behind the Rites and Rituals of the World's Religions”. New York: Penguin Books.

(9) 自己決定理論は，社会的文脈における人格の発展や機能に注目する人間の動機付けに関する理論である。この理論では，人間は，心理的な成長や発展への傾向を先天的に備え，様々な課題を果たしながら一貫した自己を築こうとする積極的な存在として捉えられる。そして特定の社会的な文脈における行動がどのように，またどの程度その人の判断・意思・選択で決定されるかに注目する。この学派によると，精神的健康，成長，または幸福の上で必要なのは有能性（能力感），自立性，（他者との）関係性の充実であり，これら３つは先天的で人類普遍的な基本的心理欲求として位置付けられている(Deci and Ryan 2000, Ryan and Deci 2000参照)。

(10) たとえば，Pyszczynski, Greenberg and Solomon 1997, p.5参照。より最近は，恐怖管理理論が進化論の枠組みから外れていないというTMT論者の断固した姿勢はSheldon et al. 2004, Landau et al., 2007にも見られる。

(11) 進化心理学では，宗教は具体的な環境問題を解決するように出来た認知能力・システムの進化の副産物であると見なされている(Hinde 1999, Boyer 2001, Atran 2002, Kirkpatrick 2005, Tremlin 2006)。したがって，宗教自体には進化的適応性を認めず，この学派では，個体あるいは遺伝子レベルの適応性のみを認める傾向が強い。一方，必ずしも進化心理学ではないが，進化論をもとに考え，集団レベルでの適応性を含めた多次元的適応性を認める学派もある。これらの論者は，宗教団体は道徳的な規範や罰則，経済的支援のネットワークなどといった文化的・社会的な仕組みを通じて自らの生存や遺伝子伝達を確保できると考え，宗教の進化的適応性を主張している(Wilson 2002, Richerson and Boyd 2005など)。

(12) 外発的動機のある宗教者とは宗教に関わることによって社会的な地位や経済的な利益を得ようとする者，また自民族主義の傾向を示すか人種的偏見を持つ者のことである。一方，内発的動機のある者は，精神的な成長や他人への奉仕をより重視し，他の宗派や宗教に許容的である（Allport and Ross 1967参照）。

(13) 宗教心を持つ人の死後への不安に関しては，処罰への恐怖が最も多いが，早くも19世紀の終わり頃，心理学者のS. ホール(Hall)は，総括的な恐怖の研究調査によって死後に愉快なはずの天国に向かうことを恐れた２人のケースを報告している（Hall 1897）。

(14) 死後への楽観的で前向きな態度にもかかわらず，死の恐怖が解消されていないというケースを記録した研究についてJ.B.マッカーシは「命が永遠であり，死後の生が確実であると信じていても，《人は》死の不可解さに動揺する」と指摘している（McCarthy, p.102）。

(15) Goodman 1981, Neale 1973, Choron 1963, Murphy 1965/1959など参照。

(16) Wong 2005参照。

(17) たとえば，意味に関する最近の調査として，Routledge and Juhl 2009, Landau et.al 2006が挙げられる。

(18) Pyszczynski, Greenberg and Goldenberg 2003, Mikulnicer and Florian 2000, Florian and Mikulincer 1998, など参照。

文献

Alexander I. E. and Alderstein, A. M.（1965）. “Death and Religion”. In H. Feifel（ed.）, The Meaning of Death,（pp.271-283）, New York: McGraw and Hill.

Allport, G. W. and Ross, J. M.（1967）. “Personal Religious Orientation and Prejudice”, Journal of Personality and Social Psychology, 5（4）, 432-443

Al-Sabwah, M. and Abdel-Khalek, A.（2006）.“Religiosity and death distress in Arabic college students”, Death Studies, 30（4）, 365-375.

Alvarado, K.A., Templer, D.I., Bresler, C., and Thomas-Dobson, S.（1995）. “The Relationship of Death Variables to Death Depression and Death Anxiety”, Journal of Clinical Psychology, 51（2）, 202-204.

Atran, S.,（2002）. “In Gods We Trust: The Evolutionary Landscape of Religion”, Oxford: Oxford University Press.

Becker, E.（1971/1962）. “The Birth and Death of Meaning”, New York: Free Press.

Becker, E.（1973）. “The Denial of Death”, New York: Free Press.

Becker, E.（1975）. “Escape from Evil”, New York: Free Press.

Berman, A.L.（1974）. “Belief in Afterlife, Religion, Religiosity, and Life-Threatening Experiences”, Omega, 5, 127-135.

Boyer, P.（2001）. “Religion Explained: The Evolutionary Origins of Religious Thought”, New York: Basic Books.

Buss, D.M.（1997）.“Human social motivation in evolutionary perspective: Grounding Terror Management Theory”, Psychological Inquiry 8（1）, 22-26.

Choron, J.（1963）. “Death and Western Thought”, London: Collier-Macmillan.

Deci E.L., and Ryan, R.M.（2000）. “The What and Why of Goal Pursuits: Human Needs and the Self-Determination of Human Behavior”, Psychological Inquiry 11（4）, 227-268.

Dechesne M., Pyszczynski T., Arndt J., Ransom S., Sheldon, K.M., Knippenberg A.V. and Janssen J.（2003）. “Literal and Symbolic Immortality: The Effect of Evidence of Literal Immortality on Self-Esteem Striving in Response to Mortality Salience”, Journal of Personality and Social Psychology, 84（4）, 722-737.

Dezutter, J, Soenens, B., Luyckx, K., Bruyneel, S., Vunsteenkiste, M., Duriez, B., and Hutsebaut, D.（2009）. “The Role of Religion in Death Attitudes”, Death Studies, 33（1）, 73-92.

Feifel, H.（1974）. “Religious Conviction and Fear of Death Among the Healthy and the Terminally Ill”, Journal for the Scientific Study of Religion, 13, 353-360.

Feifel, H., and Nagy, V.T.（1981）. “Another Look at Fear of Death”, Journal of Consulting and Clinical Psychology, 49（2）, 278-286.

Florian, V. and Mikulnicer, M.（1998）. “Symbolic Immortality and the Management of the Terror of Death: The Moderating Role of Attachment Style”. Journal of Personality and Social Psychology, 74（3）, 725-734.

Goodman, L.M. （1981）.“Death and Creative Life – Conversations with Prominent Artists and Scientists”, New York: Springer Publishing company.

Greenberg, J., Pyszczynski, T. and Solomon, S.（1986）. “The causes and consequences of a need for self-esteem: A terror management theory”. In R.F. Baumeister（ed.）, Public Self and Private Self（pp.189-212）. New York: Springer-Verlag.

Greenberg, J., Pyszczynski, T., Solomon, S., Rosenblatt, A., Veeder, M., Kirkland, S. and Lyon, D.（1990）. “Evidence for Terror Management Theory: II. The Effects of Mortality Salience on Reactions to Those Who Threaten or Bolster the Cultural Worldview”. Journal of Personality and Social Psychology, 58（2）, 308-318.

Greenberg, J., Simon, L., Pyszczynski, T., Solomon, S., and Chatel, D.（1992）. “Terror management and tolerance: Does mortality salience always intensify negative reactions to others who threaten one's worldview?” Journal of Personality and Social Psychology, 63（2）, 212–220.

Greenberg, J., Pyszczynski, T., Solomon, S., Pinel, E., Simon, L., and Jordan, K.（1993）. “Effects of self-esteem on vulnerability-denying defensive distortions: Further evidence on anxiety-buffering function of self-esteem”, Journal of Experimental Social Psychology, 29, 229-251

Greenberg, J., Simon, L., Porteus, J., Pyszczynski, T., and Solomon, S.（1995）. “Evidence of a terror management function of cultural icons: The effects of mortality salience on the inappropriate use of cherished cultural symbols”, Personality and Social Psychology Bulletin, 21, 1221-1228.

Hall, S.（1897）. “A Study of Fears”, American Journal of Psychology, 8（67）, 147-249.

Hinde, R. A.（1999）. “Why Gods Persist: A Scientific Approach to Religion”, London, New York: Routledge.

Jonas, E. and Fischer, P.（2006）. “Terror Management and Religion: Evidence That Intrinsic Religiousness Mitigates Worldview Defense Following Mortality Salience”, Journal of Personality and Social Psychology, 91（3）, 553-567.

Kahoe, R.D. and Dunn R.F.（1975）. “The Fear of Death and the Religious Attitudes and Behavior”, Journal of the Scientific Study of Religion, 14, 379-382.

Kirkpatrick, L.A.（2005）. “Attachment, Evolution and the Psychology of Religion”, New York: Guilford Press.

Kirkpatrick, L.A.（2006）. “Religion Is Not an Adaptation”. In P. McNamara（ed.）Where God and Science Meet: Vol.1, How Brain and Evolutionary Studies Alter Our Understanding of Religion（pp.159-179）. Westport: Praeger Publishers.

Landau, M. J., Greenberg, J, Solomon, S., Pyszczynski, T., and Martens, A.（2006）. “Windows Into Nothingness: Terror Management, Meaninglessness, and Negative Reactions to Modern Art”, Journal of Personality and Social Psychology, 90（6）, 879-892.

Landau, M.J., Solomon S., Pyszczynski, T., and Greenberg J. （2007）. “On the compatibility of the Terror Management Theory and perspectives on human evolution”, Evolutionary Psychology, 5（3）, 476-519.

Leary, M.R., Tambor, E.S., Tendal, S.K., and Downs, D.L. （1995）. “Self-esteem as an Interpersonal Monitor: The Sociometer Hypothesis”, Journal of Personality and Social Psychology, 68（2）, 518-530.

Leary, M.R., and Schreindorfer L.S. （1997）. “Unresolved Issues with Terror Management Theory”, Psychological Inquiry, 8（1）, 26-29.

Leary, M.R., and Baumeister, R.F. （2000）. “The Nature and Function of Self-esteem: Sociometer Theory”. In M.P. Zanna （ed.）, Advances in experimental social psychology, （Vol.1, pp.1-62）. San Diego: Academic Press.

Leary, M.（2004）. “The Function of Self-esteem in Terror Management Theory and Sociometer Theory: Comment on Pyszczynski et al.（2004）”, Psychological Bulletin, 130（3）, 478-482.

Martin, D., Wrightsman, L.S. （1965）. “The Relationship between Religious Behavior and the Concern about Death”, Journal of Social Psychology, 65, 317-323.

McCarthy, J.B.（1980）. “Death Anxiety: The Loss of Self”, New York: Gardner Press.

Mikulnicer, M. and Florian,V. （2000）. “Exploring individual differences in reactions to mortality salience – Does attachment style regulate terror management mechanisms?”, Journal of Personality and Social Psychology, 79（2）, 260-273.

Muraven, M. and Baumeister, R.F. （1997）. “Suicide, sex, terror, paralysis and other pitfalls of reductionist self-preservation theory”, Psychological Inquiry, 8（1）, 36-40.

Murphy, G.,（1965/1959）. “Discussion” in Herman Feifel （ed.）, The Meaning of Death （pp.317-340）. New York, London, Sidney, Toronto: McGraw-Hill Book Company.

Neale, R. E. （1973）. “The Art of Dying”, New York, Evanston, San Francisco, London: Harper and Row Publishers.

Power, T. L., and Smith, S. M. （2008）. “Predictors of Fear of Death and Self-Mortality: An Atlantic Canadian Perspective”, Death Studies, 32（3）, 253-272.

Pyszczynski, T., Greenberg, J. and Solomon, S. （1997）. “Why do we need what we need? A terror management perspective on the roots of human social motivation”, Psychological Inquiry, 8（1）, 1-21.

Pyszczynski, T., Greenberg, J. and Solomon, S. （1999）. “A Dual-Process Model of Defense Against Conscious and Unconscious Death-related Thoughts: An Extension of Terror Management Theory”, Psychological Review, 106, 835-846.

Pyszczynski, T., Greenberg, J. and Goldenberg, J. （2003）. “Freedom versus fear: On the defense, growth and the expansion of the self.” In Leary M.R. and Tangney, J.P. （eds.）, Handbook of Self and Identity （pp.314-343）. New York: Guilford Press.

Pyszczynski, T., Greenberg, J., and Solomon, S. （2004）. “Why Do We Need Self-Esteem? A Theoretical

and Empirical Review", Psychological Bulletin, 130（3）, 435-468.

Pyszczynski T., Solomon. S., and Greenberg J.（2006/2003）. "In the Wake of 9/11: The Psychology of Terror", Washington, DC: American Psychological Association.

Pyszczynski,T., Greenberg, J., Solomon, S., and Maxfield, M.（2006）. "On the Unique Psychological Import of the Human Awareness of Mortality: Theme and Variations", Psychological Inquiry, 17（4）, 328-356.

Richerson, P. J. and Boyd, R.（2005）. "Not by Genes Alone: How Culture Transformed Human Evolution", Chicago, London: The University of Chicago Press.

Roff, L.L et al.（2002）. "Death anxiety and religiosity among Lithuanian health and social service professionals", Death Studies, 26（9）, 731-742.

Rosenblatt, A., Greenberg, J., Solomon, S., Pyszczynski, T., and Lyon, D.（1989）. "Evidence for Terror Management Theory: I. The Effects of Mortality Salience on Reactions to Those Who Violate or Uphold Cultural Values", Journal of Personality and Social Psychology, 57（4）, 681-690.

Routledge, C. and Juhl, J.（2009）. "When Death Thoughts Lead to Death Fears: Mortality Salience Increases Death Anxiety for Individuals Who Lack Meaning in Life", Cognition and Emotion. First published on 18 May 2009（Ifirst）. URL: http://dx.doi.org/10.1080/02699930902847144（2009年11月15日アクセス）。

Ryan, R.M. and Deci, E.L.（2000）. "Self-Determination Theory and the Facilitation of Intrinsic Motivation", Social Development and Well-Being, American Psychologist, 55（1）, 68-78.

Ryan, R.M. and Deci, E.L.（2004）. "Avoiding Death or Engaging Life as Accounts of Meaning and Culture: Comment on Pyszczynski et al.（2004）", Psychological Bulletin, 130（3）, 473-477.

Schimel J., Hayes J., Williams T., and Jahrig J.（2007）. "Is Death Really the Worm at the Core? Converging Evidence That Worldview Threat Increases Death-Thought Accessibility", Journal of Personality and Social Psychology, 92, 789-803.

Sheldon.S., Greenberg, J., Schimel, J., Arndt, J., and Pyszczynski, T.（2004）. "Human Awareness of Mortality and the Evolution of Culture." In Schaller, M. and Crandall, C.S.（eds.）, The Psychological Foundations of Culture（pp.15-40）. London: Lawrence Elbaum.

Solomon, S., Greenberg, J., and Pyszczynski, T.（1991）. "A terror management theory of social behavior: The psychological functions of self-esteem and cultural worldviews". In M. P. Zanna（ed.）, Advances in experimental social psychology（Vol. 24, pp.93-159）. San Diego: Academic Press.

Spilka, B., Stout, L., Minton, B., and Sizemore, D.（1977）. "Death and Personal Faith: A Psychometric Investigation", Journal for the Scientific Study of Religion, 16, 169-178.

Thorson, J.A., and Powell, F.C.（1990）. "Meanings of Death and Intrinsic Religiosity", Journal of Clinical Psychology, 46, 379-391.

Tremlin, T.（2006）. "Minds and Gods: The Cognitive Foundations of Religion", Oxford: Oxford University Press

Wilson, D.S.（2002）. "Darwin's Cathedral: Evolution, Religion and the Nature of Society", Chicago: The University of Chicago Press.

Wong, P.T.P.（2005）. “The Challenges of Experimental Existential Psychology: Terror Management or Meaning Management?”A book review of Handbook of Experimental Existential Psychology, PsycCritique（Contemporary Psychology: APA Review of Books）, URL: http://www.psycinfo.com/psyccritiques（2009年11月14日アクセス）。

Zilboorg, G.（1943）. “Fear of Death”, Psychoanalytic Quarterly, 12, 464 - 475.

河野由美（2000）。「大学生の宗教観と死観及び死の不安に関する計量的研究」,『飯田女子短期大学紀要』, ５月, 第17集, 73 - 87頁。

Death and Religion in Recent Psychological Theories: A Critical Examination of the Terror Management Theory

Ilja MUSULIN

Terror Management Theory (TMT) is a broad theory of human motivation and behavior that has emerged from the field of social, experimental psychology and has, in the past two decades, influenced to a significant extent a wide array of research on psychology and culture, including religion.

This paper examines the notion of religion and the relationship between death and religious belief within this theory, and offers a critique of its assumptions and approach to studying religion from the viewpoint of religious studies as well as the discipline of life and death studies (shiseigaku).

The paper is structured as follows. I begin by giving a brief overview of the main theoretical tenets and research methods of TMT. This is followed by a discussion of the way TMT approaches and perceives religion. Next, I introduce the critique that has been leveled at this theory by other dominant approaches in the field of psychology. Finally, I offer my own critique of the theoretical assumptions, methodology and conclusions of TMT regarding the nature of religion, and the function and importance of death anxiety in religion.

The paper concludes that TMT views religion as the ultimate death anxiety buffer whose very existence is largely due to this quality, but in doing so fails to address the anxiety provoking side of religious doctrines and beliefs. TMT has not sufficiently addressed empirical psychological studies that challenge its main tenets regarding the relationship between death anxiety and religion, and seems not be truly aware of the multitude and diversity of religious beliefs. The paper warns about the reductionist tendency in TMT's approach to religion and calls for more in-depth research concerning death anxiety and religion in non-Western contexts.